

1997年度のおもな調査

第274次調査区全景(北から)

中央左上より右下に延びる高まりが宮東面大垣SA4340、左端の溝が東一坊大路西側溝SD4951、大垣の右側が宮内基幹排水溝SD3410。このほか、大垣の堀地部分では、掘立柱建物5棟を検出した。画面中央部に、大垣を横断する開渠溝SD17650(検出途上)がみえる。SD17650は奈良時代中頃まで機能しており、この部分の大垣はとぎれていたと考えられる。SD3410の右隣は昨年度の第273次調査区。本文4頁参照(撮影/牛嶋 茂)

二条条間路北側溝(第281次調査)

二条条間路のうち、阿弥陀浄土院と推定されている左京二条二坊十坪南側部分の調査。北側溝は東西ほぼ1町ぶんにわたって調査し、木簡をはじめとする多量の遺物が出土した。当初硬いシルト層を深く掘り込んだ溝であったが、坊間小路との交差部分は奈良時代後半に一度埋め戻され、その上に門が築かれている。これにあわせて板と杭でつくられた護岸をとまなう浅い溝に改修された。本文56頁参照(撮影/佃 幹雄)

第280次調査南地区（西から）

東院庭園・隅楼の全景。これまでの調査で建物の存在をつかんでいたものの、本調査では八角形断面の柱根を新たに2基検出し、極めて特異な柱配置をもつことを確認した。東西2条の柱列は布掘状に見えるが、本来は独立した柱穴である。このほか、隅楼建設前には園池からの排水路が設けられていたことなどがわかった。本文16頁参照（撮影／杉本和樹）

東院園池南岸建物・掘込地業の断面 （第284次調査・西から）

東院園池南岸建物SB17700の北側柱列は、幅2.5m、推定長さ19m、深さ1.5mにおよぶ大規模な布掘地業をとまう。下部にある人頭大の石は、奈良時代前半の南岸建物SB17582にともなう下層園池の石敷SX17705に由来するもの。また、上部に見える石敷は、SB17700廃絶後に園池南岸を飾った洲浜SX17710である。本文26頁参照（撮影／佃 幹雄）

ガラス埴塼蓋

砲弾形ガラス埴塼にとまう蓋の内面。いずれも直径10cm前後の円盤に復元でき、本来は頂部に長方形のつまみがつく。内面には鉛ガラスが熔着し、その濃淡から埴塼の口径も復元できる。ガラス埴塼蓋は、明日香村飛鳥池遺跡でその存在が知られるようになったが、平城宮・京城での確認は初めてである。上は左京二条二坊、下は宮東院地区出土。本文52頁参照（撮影／佃 幹雄）